

18世紀貴婦人の「田舎風」の装い

— ポンパドゥール侯爵夫人の肖像画と芝居から —

Eighteenth Century French Aristocrats' "Peasant Style" Attire:
Based on a Portrait and a Play Portraying the Marquise de Pompadour

木 下 ミルテ*

Mirute KINOSHITA

要 約 18世紀フランス貴族は刺繍、レース、リボン、花々などで装飾された贅沢な衣服を身にまとい、厳しい宮廷規範に則った生活をしていた。一方、彼らの間には田園への憧れがみられ、農民に扮した「田舎風」の肖像画が描かれた。ルイ15世の公式愛妾ポンパドゥール侯爵夫人もまた女庭師に扮した姿の肖像画を残し、自ら企画した芝居では羊飼いの役で登場している。死後に作成された『ポンパドゥール侯爵夫人の遺産目録』には「田舎風」の被りものの記載があることから、「田舎風」のファッションが確立していたことがわかる。本論では画家ドルーエらの描いた肖像画やポンパドゥール侯爵夫人が演じた芝居の衣装の記録をとりあげ、「田舎風」衣装の詳細を考察する。彼らはエプロンや麦わら帽子などの農民特有のアイテムを取り入れつつも、貴族らしくレースや真珠のブレスレットをつけている。それは貴族が理想化した架空の田園におけるロココ様式のファッションである。

キーワード：ポンパドゥール侯爵夫人、18世紀、遺産目録、田舎風、芝居

Abstract Eighteenth century French aristocrats dressed in clothes embellished with embroidery, lace, ribbons, and flowers and adhered to strict court norms. However, they had a longing for the countryside, and many even had their portraits painted while they were dressed as peasants. For instance, the Marquise de Pompadour, Louis XV's mistress, was painted while dressed as a gardener and even appeared as a shepherd in a play she organized. The origins of this "peasant-style fashion" are found in the description of peasant headgear from the "Estate inventory of Marquise de Pompadour." In this study, details of "peasant style" clothing are discussed while considering portraits painted by the painter Drouais and the records of the costume of the play performed by Marquise de Pompadour. The use of aristocratic lace and pearl bracelets, while incorporating peasant items like aprons and straw hats, depicts a Rococo fashion in an imaginary countryside idealized by aristocrats.

Key words : Marquise de Pompadour, 18th century, Estate inventory, Peasant style, Play

1：はじめに

ルイ15世の公式愛妾ポンパドゥール侯爵夫人 (Jeanne-Antoinette Poisson, marquise de Pompadour 1721-1764) は、20年間にわたりヴェルサイユ宮殿

で過ごし、政治への関与もさることながら、芸術家たちへの支援を惜まず、ロココ文化を牽引した女性として知られている。その影響は服飾にも及び、髪型や衣服の織地¹⁾、色などにも彼女の名前は残っている。

ポンパドゥール侯爵夫人の肖像画はブーシェ (François Boucher 1703-1770) をはじめ、ラ・トゥール (Maurice-Quentin de La Tour 1704-1788)、

* 人間生活学研究科 生活環境学専攻
Graduate School of Human Life Science,
Division of Living Environment

ヴァンロー (Carle Vanloo 1705-1765), ドルーエ (François Hubert Drouais 1727-1775) など当時人気があった画家たちによって多数製作された。肖像画は宮廷服のローブ・ア・ラ・フランセーズの姿だけでなく、当時の上流階級の流行に従い、神話に登場する女神やスルトンヌなどに扮したものもある。

18世紀の宮廷服は刺繍、リボン、レースなどで豪華に装飾されているが、同時代の貴族たちの肖像画には、「田舎風」の姿で描かれたものも多く残っている。ロココを代表する画家の1人であるブーシェが1740年代から、パストラル(牧歌的恋愛風景)を題材にした作品をサロンで度々展示している²⁾ことからわかるように、貴族たちは宮廷とは真逆の素朴な田園風景にある種の憧れを抱いていたのだらう。

本論で扱う史料は以下の通りである。

図像としては宮廷画家として評判が高かったヴァンローの描いた《美しい女庭師に扮したポンパドゥール侯爵夫人 (Portrait of Madame de Pompadour as a gardener)》(1760年頃)(Fig.1)と同時代の貴族の「田舎風」の肖像画をとりあげる。文書としては『ポンパドゥール侯爵夫人の遺産目録 (Inventaire des biens de Madame de Pompadour, rédigé après son décès)』³⁾を用いる。これは彼女の服飾品を調査するうえで重要な史料の1つである。服飾品の類は、「パリのレイニーの館 (Hôtel de la Reynie à Paris)」に運ばれ、1097番から1152番までが9つのトランクに収められた⁴⁾。ただし、服飾品1つ1つに関する記載がすべて存在するわけではなく、数点がまとめられた「～が入った包みが1つ (un paquet contenant)」や「描写に値しない (qui ne méritent description)」などの記述もある。また、遺体埋葬時に使用した物や生前に故人が他人に譲るなどして手放した物⁵⁾は、遺産目録に記されない場合がある⁶⁾。さらに本論では、芝居に関する史料も取り上げる。ポンパドゥール侯爵夫人が芝居で使った衣装は、カンパルドン (Émile Campardon 1837-1915) の書籍に記されている。彼女が演じた芝居の中で、田園が背景の「イスメネ (Isméne)」と「エグレ (Églé)」の衣装に着目する。以上のような肖像画に描かれた服飾や、芝居の衣装から、貴族たちにとっての「田舎風」とはどのような装いであったかを考察したい。



Fig. 1 Carle Vanloo, *Portrait of Madame de Pompadour as a gardener*, around 1760, Musée national des Châteaux de Versailles et de Trianon

2: 「美しい女庭師」の服飾

ヴァンローの《美しい女庭師に扮したポンパドゥール侯爵夫人》(1760年頃)(Fig.1)の肖像画は、ポンパドゥール侯爵夫人が特に気に入っていた作品である⁷⁾。夫人の死後、弟マリニー侯爵 (marquis de Marigny 1727-1781) の手に渡り、1782年に売却された。その時のカタログには、「田舎風の服を着た上半身の女性の肖像画」と記載された⁸⁾。

「庭師」の題材は独創的なものではなく、1750年代あたりに流行していた「変装した姿の肖像画」のひとつである。この作品は1755年から1760年にかけて製作され、ポンパドゥール侯爵夫人の依頼で建築されたベルヴュー城に置かれた⁹⁾。城の中の「トルコ風」の寝室には、同じくヴァンローがトルコ風の装いのポンパドゥール侯爵夫人を描いた《カフェを飲むスルトンヌ (Sultana taking coffee)》(1752年頃)が飾られた¹⁰⁾。1753年にはここでバレエやコメディなども演じられており、ベルヴュー城には異国への関心、芝居への情熱など様々な彼女の嗜好が詰め込まれていた。

美しい女庭師の肖像画 (Fig.1) では、モデルは田舎風の被り物である麦わら帽子¹¹⁾を被っている。宮廷服のローブ・ア・ラ・フランセーズに身を包んだ他の彼女の肖像画では、当時の貴族女性の髪型に従って編んだ髪に宝石、花々を飾り、被り物をしているものは少ない。

INHA (Insuite National d'Histoire de l'Art) の研究員であるジュリエット・トレイは、カンパルドンの『プチ・アパルトマンでのバレエのための衣装の描写 (Etat des habites faites pour les ballets des petite appartements)』に記された「田舎風衣装」とヴァンローの肖像画の衣装が似ている点を指摘している。カンパルドンによると夫人が芝居で使用した田舎風の衣装は「コルセット、白色のタフタのスカートと青色のペプラム」だった¹²⁾。この肖像画のボンパドゥール侯爵夫人は、カンパルドンの描写とは異なるが、白色のドレスを着て青色のリボンがアクセントになっている。

また 2002 年にフランスで開催された「ボンパドゥール侯爵夫人と芸術」展¹³⁾のカatalogでこの肖像画の解説を書いたティエリー・バジョーは夫人の花かごは友情を、手にしたジャスミンは親切や優雅さを象徴しており、この作品は国王との肉体的な関係ではなく、友情を描き出すことを目的とした夫人の計画の 1 つであったと指摘している¹⁴⁾。ボンパドゥール侯爵夫人と国王の関係は 1750 年頃から変化しており、ボンパドゥール侯爵夫人は国王にとって信頼のおけるアドヴァイザー兼友人であった。彼女は其の教養とセンスを駆使して、メランコリックな性質の国王を様々な方法で楽しませた。そのひとつとして自ら芝居で演じることがあった。「異国風」や「田舎風」に扮する装いは当時の貴族の流行でもあったが、ボンパドゥール侯爵夫人はまた、田園風景や植物への関心を示しており、この肖像画からもそれを伺うことができる¹⁵⁾。

もっとも、この作品 (Fig.1) は「田舎風」であると同時に、貴族的な要素が多々みられる。花の髪飾り、金の耳飾り、幾重にも連なった真珠のブレスレット、袖口を飾る薄布などは、当時の貴婦人にしかない装飾品である。現実にはない、舞台衣装のような女庭師の姿である。

3: ドルーエの作品にみられる「田舎風」に扮した貴婦人の肖像画

ドルーエはルイ 15 世の宮廷でナティエ (Jean-Marc Nattier 1685-1766) の後継者として知られる画家である。同じく画家の父を持ち、ノノット (Donatien Nonnotte 1708-1785) やブーシェらの下で学んだ。1750 年代から 1760 年代には、貴族たちの間ではドルーエの手による肖像画を所持することが流行したほどの人気を博した。ナティエとは違って、彼は神話を題材にはせず、豪華な衣装、華麗な調度品や美しい庭園の背景に、優雅なポーズでモデルを描いた¹⁶⁾。ドルーエは 1758 年にアカデミーの会員となり、ボンパドゥール侯爵夫人とデュ・バリー夫人 (Marie-Jeanne Bécu, madame du Barry 1743-1793) をはじめ、同時代の名のある貴族たちを流行の衣装だけでなく、田舎風の衣装でも描いた¹⁷⁾。本論では「ぶどうの収穫者に扮したゲメネ公とスービーズ嬢 (The Prince de Guéméné and Mademoiselle de Soubise dressed as Grape Harvesters)」(1757) (Fig.2) と「庭師に扮したコンデ王子と王女 (The Prince and Princess Condé dressed as Gardeners)」(1757) (Fig.3) をとりあげる。

前者 (Fig.2) では、画面の中央に座り、スカートの上ぶどうをのせたスービーズ嬢と、彼女の傍に立ち、ぶどうを差し出している少年のゲメネ公が描かれている。少年は麦わら帽子を被り、薄いピンク色のジャケットと同色のリボンが膝に結ばれている半ズボン、白いシャツとストッキング、白いリボンで飾られた靴を履いている。一方、少女はヴァンローのボンパドゥール侯爵夫人の肖像画 (Fig.1) と同様に、青色の布で裏打ちされた麦わら帽子を被り、首には青いリボンをつけている。ピエス・デストマ (胸当ての装飾布) にはリボンや造花などの装飾はなく、青い紐のみで縛り上げられており、白いスカートの裾には 2 本の青いラインが入っている。2 人の豪華な絹の衣装は実際の「ぶどうの収穫者」としては現実的なものではなく、彼らが実際には裕福な身分であることは明らかである¹⁸⁾。

後者の「庭師に扮したコンデ王子と王女」(Fig.3) では、野菜を膝の上にのせて座っている女性と、その傍らでシャベルに寄りかかって立つ青年とが描かれている。青年はカールさせた髪を後ろで束ねたスタイルのかつらをつけ、青色のジャケッ



Fig. 2 François Hubert Drouais, *The Prince de Guéméné and Mademoiselle de Soubise dressed as Grape Harvesters*, 1757, Waddesdon Manor

トとベスト、膝の部分に青色のリボンを結んだ黄色の半ズボン、白いストッキング、ズボンと同じ黄色で青いリボンをつけた靴を履いている。シャベルを手にはしているが、明らかに貴族の服装である。

女性は髪に花を飾り、ピンク色の帽子に首に結んだ同色のリボン、胸部分を白色の紐で縛り上げたピンクの絹のドレスに、金のバックルがついたピンク色の靴を履いている。ピンク色のスカートを腿の上にも持ち上げており、下に履いた白いスカートには3本のピンクのラインがある。2人の服装や髪型からはモデルの裕福さが充分にうかがえ、「庭師」として架空の衣装を着用していることがわかる¹⁹⁾。

ドルーエにとって、上記の2つの作品のような牧歌的な恰好をした貴族の肖像画は生涯を通じての題材であった²⁰⁾。どちらの作品でも、女性は「田舎風」を象徴する麦わら帽子を被り、労働者のように一番上のスカートを腿の上までたくし上げて、そこに農作物を置いている。男性も麦わら帽子や農具といった「田舎風」のモチーフを手にはしている。しかし男



Fig. 3 François Hubert Drouais, *The Prince and Princess Condé dressed as Gardeners*, 1757, Waddesdon Manor

性の半ズボンとストッキングや髪粉をふったかつら、女性の頭部の花飾り、首のリボン飾りや絹のドレス、金のバックルなどは貴族特有の服飾である。さらに、ヴァンローの「田舎風」に装ったボンパドゥール侯爵夫人の肖像画 (Fig.1) では、ドルーエの作品にはみられない真珠のプレスレットや金の耳飾りも確認できる。ロココ時代の貴族たちも身に着けた真珠のプレスレットは、多くの肖像画に見られるが、「田舎風」の肖像画においても例外ではない。

例えばノノットの《女性の肖像画 (A portrait of a woman)》(1755) (Fig.4) では、モデルは両腕に2連の真珠のプレスレットをつけており、右腕のプレスレットには、金で縁取られた深緑色の宝石がついている。また、袖口にアンガジャント風の高価なレースの装飾がみられることから、モデルが貴族であることは明らかである。

しかしこれらの2人の画家による肖像画の女性のドレスはすべて胸部分を紐で締め上げただけの、貴



Fig. 4 Donatien Nonnotte, *A portrait of a woman*, 1755, Musée des Beaux-Arts de Dijon

族にしてはシンプルなデザインである。当時の女性の宮廷服であるローブ・ア・ラ・フランセーズは、V字型に開いた胸の部分に逆三角形で下端がV字またはU字になった形状のピエス・デストマを装着した。ここは最も人目をひく部分であったため、凝った模様の織地、豪華な刺繍やレース、リボン結びを諧調的に並べたエッセルなどの装飾をほどこし、さらに宝石を飾ることもあった。これはローブを着る度にピンでとめた²¹⁾ので、貴婦人の装いの中でも特に重要なアイテムであった。ボンパドゥール侯爵夫人の遺産目録上にも、異なった形状と大きさのピエス・デストマが 98 個も記録されている²²⁾。つまり、3 つの肖像画の女性たちは、下層階級のデザインと貴族階級のディテールが混ざりあったものである。

では、実際の 18 世紀の田舎娘 (paysanne) の服装は具体的にはどのようなものだろうか。『世界中のよく知られている民族の現代民衆の服装：写生を元にした彩色版画：服装、風習、宗教等々についての歴史的注釈付き (Costumes civils actuels de tous les peuples connus, dessinés d'après nature, gravés et colories, accompagnés d'une notice historique sur leurs



Fig. 5 *A peasant farmer near Soleure*, 1788, The Library of Bunka Gakuen

costumes, mœurs, religions)』(1788)に収録された版画から、たとえばフランスにほど近い《ソルール近郊の田舎娘 (A peasant farmer near Soleure)》(Fig.5)と《ベルン近郊の牛乳配達人 (A milkwoman near Berne)》(Fig.6)では、どちらの女性もドルーエらが描いた肖像画と同様に帽子を被り、ドレスの胸部分には装飾がなく、紐で縛り上げている。

また、『フランスの服飾：王国におけるさまざまな身分階級を示すフランスの服飾、批評的かつ道徳的考察を付した各階層固有の衣服 (Les costumes françois [i.e. français] : representans les differens Etats du royaume avec les habillemens propres à chaque Etat et accompagnes de reflections critiques et morales Paris)』(1776)に収録されている《庭師と田舎娘 (A gardener and a peasant farmer)》(Fig.7)では、田舎娘はエプロンをしており、胸の部分がシンプルな点は共通している。



Fig. 6 A milkwoman near Berne, 1788, The Library of Bunka Gakuen



Fig. 7 A gardener and a peasant farmer (an enlarged picture), 1776, The Library of Bunka Gakuen

もちろん、農作業や家畜の世話をしていた田舎娘たちにとって、当時非常に高価だった刺繍やレース、宝石などで胸部分を装飾することなど不可能であり、紐で締め上げたデザインやエプロンは仕事をするうえでの実用性によるものである。

貴族の「田舎風」の肖像画は、麦わら帽子や胸部分のデザインは現実の働く田舎娘の服装を模倣しているものの、同時にそれとは対極的な性格のレースの装飾、リボンや花の装飾、真珠のプレスレットといった貴族的装飾も残している。

18世紀の貴族たちの間で流行していた「パストラル」や「田舎風」のファッションは、宮廷から実際にある農村の風景への逃避というよりは、あくまでも人工的で貴族的な要素と田舎風の要素を混ぜ合わせた、彼らの思い描く理想郷を反映したものである。

4：遺産目録にみられる被り物

『ポンパドゥール侯爵夫人の遺産目録』には、ドレス、部屋着、履物など多岐にわたる服飾品が記載されている。その中で「田舎風 (paysanne)」の記述がみられたのは被り物のみであった。遺産目録の被り物は《パリのレイニーの館にみられる被り物のリスト (List of headgear seen in the Hôtel de la Reynie à Paris)》(Table.1) の通りである。

ボネ (bonnet) とは頭部にフィットした小さめの被り物で、通常はつばがないが、時には小さなつばがつくこともある。頭頂部から後頭部にかけて覆い、額を出した状態で顔を縁取るようにして、多くの場合は顎の下でリボン状の紐を結わえた²³⁾。カブリオレ (cabriolet) とは本来幌付きの馬車を意味する単語であり、幌型馬車や辻馬車のフードの形を連想させる帽子である²⁴⁾。帽子 (chapeau) は主につばがあるものをさす²⁵⁾。コアフ (coiffe) は coiffe と表記する²⁶⁾こともあり、coeffure, coiffure, coeufure は全てコアフと判断する。コアフの定義は広く、汗から保護するために男性がかつらの下につけた小さな麻布製の服飾品や、女性が帽子と髪の接触を避けるために使った薄い革でできた円形の装飾品から、貴族の女性の頭頂部を飾るギャザーを寄せた薄い絹の帽子までコアフと呼ばれるものは多様である²⁷⁾。

遺産目録に登場した被り物は総数 85 点に及び、そのうち「田舎風の被り物」あるいは「田舎風レース (dentelle à la paysanne)」がついたものは 11 点

Table 1 List of headgear seen in the Hôtel de la Reynie à Paris

被り物 (つづり原文ママ)	総数
bonnet	35
cabriolet	1
chapeau	1
coeffe (petite coeffe14件、 coeffure18件、coiffure2件、 coefure1件も含む)	48

で、それらは全てコアフと記載されている。詳細は以下の通りである。

- 1118: 田舎風のレースで装飾されたモスリンのコアフが9つ²⁸⁾
 1131: 田舎風の他の小さなコアフ1点 (中略), 田舎風のコアフ1点²⁹⁾

コアフを頭頂部につけた姿は、たとえば、ペテルス (Johann Anton de Peters 1725-1795) の《花かごを持った若い女性 (A young woman with a bouquet of flowers)》(1763?) (Fig.8) の作品で確認できる。これは恐らく踊り子か女優が花売りに扮した姿で、右手に花、左腕に花かごをさげたポーズは、ヴァンローのボンパドゥール侯爵夫人の肖像画 (Fig.1) と一致している。「田舎風」を意識した作品であることは明らかであるが、ペテルスのモデルは麦わら帽子ではなく、薄い青色のコアフを頭頂部付近につけている。コアフを装飾するリボンや同色の首のリボン、ドレスを装飾するリボンや花飾りは贅沢に銀で飾られ、貴族らしい贅沢な装いである。「田舎風」の肖像画にみられる頭頂部を飾る実用性のないコアフは、まさに貴族的な服飾であるといえよう。

また、ヴァンローのボンパドゥール侯爵夫人の肖像画 (Fig.1) に描かれた、田舎風の象徴であった麦わら帽子 (chapeau de paille) は遺産目録に登場しない。おそらく、ボンパドゥール侯爵夫人が他人に譲渡したか、画家がモデルに着用させるために用意したか、あるいは舞台衣装だったのであろう。



Fig. 8 Johann Anton de Peters, *A young woman with a bouquet of flowers*, 1763?, RMN-Grand Palais / Gérard Blot / distributed by AMF

5：ボンパドゥール侯爵夫人の芝居にみられる「田舎風」の演目と衣装

ボンパドゥール侯爵夫人はヴェルサイユ宮殿とベルヴュー城でパレエや芝居を上演している。ヴェルサイユ宮殿では 1747 年から 1749 年まで、芝居のシーズンごとに 4-5 回の上演を繰り返しており、たいていの場合、演目はオペラと芝居の組み合わせであった。彼女は宮廷内に自ら小さな劇場を作り、歌や芝居が上手な宮廷の人々を集めて公演をオーガナイズした。出演者たちには練習が義務づけられるなど厳しい規則が課せられた。上演作品、日時、公演回数は女優たちが決定したが、それはすなわちボンパドゥール侯爵夫人自身が主要な役を務めることに他ならなかった。ボンパドゥール侯爵夫人の手による芝居の公演は、限られた観客数しか収容できなかったこともあり、すぐに貴族たちの間で評判となった。彼女はまた、国王や特に親しい貴族だけを招いた特別公演も行なった。ベルヴュー城の中国風の装飾が施された小さな劇場では、1751 年から 1753 年まで公演が行われた³⁰⁾。

ボンパドゥール侯爵夫人の 3500 冊にも及ぶ蔵書

の中には芝居に関する書籍も多く³¹⁾、芝居への情熱は明らかである。彼女は、幼少期から声楽やバレエのレッスンを一流の師について学び、芝居に関する才能は愛妾になる前から高く評価されていた。宮廷入りする前の1742年には、「美しいエティオール夫人は、陽気さと優雅さを合わせもって歌い、100もの歌を知っていてオペラ座と同じくらい美しい劇場で芝居を演じていた」とエノー（Charles-Jean-François Hénault 1685-1770）が手紙に記している。ここでのエティオール夫人とは、ポンパドゥール侯爵夫人のことである。また、1748年にはグレセット（Jean-Baptiste-Louis Gresset 1709-1777）が彼女の才能を称える詩を残している³²⁾。

ポンパドゥール侯爵夫人はオペラ、悲劇や喜劇、バレエなど約50もの演目を公演した。ここでは田園を背景とした2つの演目『イスメネ』と『エグレ』の衣装に着目する。

『イスメネ』は別名英雄牧歌劇（la pastoral heroica）といい、作曲家フランクール（François Francoeur 1698-1787）、脚本家モンクリフ（François-Augustin de Paradis de Moncrif 1687-1770）の作品で1747年12月20日にヴェルサイユ宮殿で上演された。ポンパドゥール侯爵夫人はこの演目のタイトルにもなっているイスメネ役を演じ、その時の衣装はカンパルドンの書籍に記されている。

新調した青色のタフタの衣服、これらは刺繍がされた紗とブロンド・レースで飾られている。スカート、胴衣、小さいスカートと白いフロランス³³⁾の裏地がついたマント...475 リーブル³⁴⁾。

同じ演目の衣装を芝居用の貸衣装屋ペロネット（Péronnet）がより詳細に記録しており、衣装には「田舎風」の被り物である麦わら帽子が含まれていたことがわかる。

胴衣、スカートと白色の裏地がついた青色のタフタのマント、これは刺繍がされた紗とブロンド・レースで飾られている。紗でできた宮廷用の袖、これは幾重にもなったブロンド・レースで飾られている。袖のリボン、プレスレットとブロンド・レースで刺繍がされた青色のリボンの首飾り。白色のタフタで裏打ちがされた麦わら帽子、これは花の冠の飾

りがついている。この仮装の費用は475 リーブルだった³⁵⁾。

『エグレ』は作曲ガルド（Pierre de La Garde 1717-1792）の喜遊曲にロジョン（Pierre Laujon 1727-1811）が脚本をつけたもので、1748年1月13日にヴェルサイユ宮殿で上演された。彼女はそこでタイトルと同名の羊飼いいグレを演じている³⁶⁾。この時の彼女もまた麦わら帽子を身につけていた。カンパルドンの書籍には以下のように記されている。

花で装飾された白色の裏地がついた麦わら帽子のみが支給された...10 リーブル³⁷⁾。

ポンパドゥール侯爵夫人のイスメネの衣装は、記録によれば刺繍や金糸、幾重にもなった袖やリボンなどの装飾があり、貴族らしい贅沢なドレスであることは明らかである。側近や親友たちで演目と配役を決め、限られた観客のみに披露した彼らの公演は、1人分の衣装代をとっても、かなり高額なものであった。

これらの芝居の衣装には、布で裏打ちされた麦わら帽子や青色と白色の布地が使用されており、前述のヴァンローの手による、《美しい女庭師に扮したポンパドゥール侯爵夫人の肖像画》（Fig.1）に似ている。ただし、肖像画に描かれたドレスには刺繍等は確認できず、舞台上で用いられたものよりもシンプルなものであろう。いずれにしても、貴族たちの考える「田舎風」は実際の田舎の人々の服装とはかけ離れた、贅沢で優美なものであったことは確かである。貴族たちがイメージする「田舎風」は、舞台上のいわゆるフィクションの田舎であった。

6：結論

ポンパドゥール侯爵夫人は、ほとんどの肖像画において、ふんだんに装飾をほどこされた豪華なドレスを身につけている。数百点のレースが記録された彼女の遺産目録からも、その贅沢さがうかがわれる。一方、遺産目録には田舎風レースのついた被り物も含まれており、ヴァンローの手による肖像画では、ポンパドゥール侯爵夫人は、麦わら帽子を被った「田舎風」のスタイルで描かれている。彼女はまた喜遊曲エグレにおいてでも、羊飼役を演じている。

この当時の貴族の田園趣味は、芝居や絵画などか

らも明らかである。細かいしきたりや儀礼に縛られた貴族社会で生活する人々にとって、自由で生命感にあふれる田舎は現実を忘れさせる憧れの対象であった。けれどもそれは、あくまで貴族の尺度によって美化された「田舎風」であり、現実とはかけ離れたものである。

本論で扱った肖像画には、麦わら帽子などの「田舎風」の要素はみられるものの、リボンや花で優美に装飾がほどこされ、真珠のプレスレット、袖口を飾る高価なアンガジャントなどは貴族特有の装飾品である。これらの肖像画にみられる芝居的で作り上げられた「田舎風」ファッションは、貴族が理想化したロココ風のパストラルの世界であるといえよう。

引用文献

- 1) 深井晃子監修, 周防珠実ほか編, 『ファッション: 京都服飾文化研究財団コレクション 18 世紀から現代まで』, タツシェン, 56 (2002)
- 2) 小林亜起子, 「ブーシェのタピスリー連作〈高貴なパストラル〉と古典的牧歌文学の伝統」, 『エクフラシス: ヨーロッパ文化研究』, 4 巻, 104 (2014)
- 3) Jean Cordéy, *Inventaire des biens de Madame de Pompadour, rédigé après son décès*, Paris, F. Lefrançois, (1939)
- 4) Jean Cordéy, *ibid.*, 74-82 (1939)
- 5) ボンパドゥール侯爵夫人の遺書には, 「召使いに衣裳部屋にあるベストやベチコートなどを譲る」という彼女の遺志が書かれている。
http://www.madamedepompadour.com/_fra_pomp_galleria/biograf/testam.htm (閲覧日 2022/10/12 14 : 52)
- 6) 徳井淑子ら著, 『フランス・モード史への招待』, 悠書館, 226 (2016)
- 7) 林精子, 「《カフェを飲むスルタンヌ》におけるボンパドゥール夫人のトルコ風衣装」, 『服飾文化学会誌』, vol.8 No.1, 26 (2007)
- 8) Xavier Salmon, *Madame de Pompadour et les arts*, Réunion des Musées Nationaux, 160 (2002)
- 9) Xavier Salmon, *ibid.*, 158 (2002)
- 10) 林精子, 前掲書, 26 (2007)
- 11) Xavier Salmon, *op.cit.*, 158 (2002)
- 12) Juliette Trey, “La mode des 《Belles Jardinières》”, in *A la mode l’art de paraître au 18^e siècle*, Snoeck, 208 (2021)
- 13) 2002 年に開催された「ボンパドゥール侯爵夫人と芸術」展はヴェルサイユ, ミュンヘン, ロンドンを巡回した。
- 14) Xavier Salmon, *op.cit.*, 158 (2002)
- 15) ボンパドゥール侯爵夫人の肖像画に関する書籍を執筆したエリーズ・グッドマンは, この肖像画はボンパドゥール侯爵夫人が芝居の中で演じた羊飼いを連想させる, と指摘している。
(Elise Goodman, *The portraits of Madame de Pompadour: celebrating the femme savante*, University of California, 12 (2000))
- 16) <https://www.nga.gov/collection/artist-info.1242.html> (閲覧日 2022/10/7 19:30)
- 17) <https://www.nationalgallery.org.uk/artists/francois-hubert-drouais> (閲覧日 2022/10/1 12:43)
- 18) <https://waddesdon.org.uk/the-collection/item/?id=3488> (閲覧日 2022/9/22 1:43)
- 19) <https://waddesdon.org.uk/the-collection/item/?id=3489> (閲覧日 2022/9/22 1:45)
- 20) 注 19 参照
- 21) 深井晃子監修, 前掲書, 42 (2002)
- 22) Jean Cordéy, *op.cit.*, 77 (1107 番) (1939)
- 23) 石山彰編, 『日英仏独対照語付 服飾辞典』, ダヴィッド社, 746 (1977)
- 24) 石山彰編, 前掲書, 746 (1977)
- 25) 石山彰編, 前掲書, 481 (1977)
- 26) coiffe | Dictionnaire de l’Académie française | 4e édition (dictionnaire-academie.fr) (閲覧日 2022/10/19 0:31)
- 27) M.Leroir, *Dictionnaire du costume*, 臨川書店, 92 (1992)
- 28) neuf coiffes de mousseline, garnies de dentelle à la paysanne (原文ママ) (Jean Cordéy, *op.cit.*, 79 (1118 番) (1939))
- 29) une autre (petite coiffe) à la paysanne ;...une coiffe de paysanne (原文ママ) (Jean Cordéy, *ibid.*, 80-81 (1131 番) (1939))
- 30) Xavier Salmon, *op.cit.*, 35-37 (2002)
- 31) Xavier Salmon, *ibid.*, 38 (2002)
- 32) Xavier Salmon, *ibid.*, 35-36 (2002)
- 33) フィレンツェ周辺, リヨン, アヴィニョンやチューリッヒなどで製造された軽いタフタのこと。(Elisabeth Hardouin-Fugier, Bernard Berthod,

- Martine Chavent-Fusaro, *Les Etoffes:Dictionnaire historique*, Les éditions de l'Amateur, 196 (1994))
- 34) Fait à neuf un habit de taffetas bleu, garny de gazes brochées et blondes. La jupe, le corps, la petite jupe et la mante doublés de florance blanc...475 livres (原文ママ) (Émile Campardon, *Madame de Pompadour et la cour de Louis XV au milieu du dix-huitième siècle ouvrage suivi du catalogue des tableaux originaux des dessins et miniatures après la mort de Madame de Pompadour du catalogue objets d'art et de curiosité du Marquis de Marigny et de documents entièrement inédits sur le théâtre des Petits Cabinets avec un portrait gravé d'après le pastel de la tour et le fac-simile d'une lettre*, Plon, Paris, 430 (1867))
- 35) Corps, jupe et mante de taffetas bleu doublé de blanc, garnis de gaze brochée et de blonde; manches de cour de gaze à plusieurs rangs de blonde; noeuds de manches, bracelets et collier de ruban bleu brodé de blonde; chapeau de paille doublé de taffetas blanc et couronné de fleurs. Ce travestissement coûtait 475 liv. (原文ママ) (Émile Campardon, *ibid.*, 94 (1867))
- 36) Adolphe Jullien, *Histoire du théâtre de Mme de Pompadour, dit théâtre des Petits Cabinets*, Libraire de la société de l'histoire de l'art français, Paris, 21-22 (1874)
- 37) Fourny seulement un chapeau de paille doublé de blanc, garni de fleurs...40 livres (原文ママ) (Émile Campardon, *op.cit.*, 433 (1867))
- (指導教員：家政学研究科被服学専攻
内村理奈教授)